



I-OWA マンスリー・セミナー講演より 世界の歴史とお金の統合

講演：今村 啓爾氏
レポーター：赤堀 薫里

今村 啓爾(いまむらけいじ)氏プロフィール

帝京大学文学部史学科 教授、東京大学名誉教授

1946 年生まれ。1974 年 7 月に東京大学大学院人文科学研究科博士課程を中退し、同年 8 月より東京大学理学部助手(人類学)を務める。1995 年 5 月に東京大学大学院人文社会系研究科教授。2012 年 4 月より帝京大学文学部教授、2017 年 4 月より帝京大学総合博物館館長。国の文化審議会委員などの経験を生かし、資料の保存と活用のための実学としての文化財学の育成と教育に努める。

大きく世界の貨幣というものを展望してみると、世界の歴史の動きと非常に関係しています。世界の長期にわたる人類の歴史の展開が見えてきます。お金とはそういうものだと思います。貨幣がどのように始まったのだろうか。今から 5000 年位前、メソポタミアで世界最古と言われるシュメール文明が起こります。そこでいろいろな物資の交換が行われるため、物資交換の仲立ちが必要となってきた。最初はいろいろなものが仲立ちになっていました。しかし、だんだん貴金属が一番便利で、量も調整でき、腐らず、いつまでも保存できるということで、貴金属が仲立ちの中心となっていきます。

小アジアのリディアで紀元前 6 世紀くらいに発行された貨幣は、一般的に人類の中で一番古い貨幣のようです。ギリシャを中心に貴金属





長期投資仲間通信「インベストライフ」

の貨幣が広がっていきます。ヨーロッパで始まった貨幣は、基本的に金や銀という貴金属です。作り方は一定の重さの金属の塊を作り、それに刻印を押します。重さが違うと価値がないと思われてしまうため、重さはきちんと確保しなくてはならない。ヨーロッパの貨幣は、リディアで始まったものがギリシャの世界に広がり、更に西のローマの世界へと広がります。同時に東のほうにもかなり早いスピードで広がります。

これに対して中国の貨幣は、銅で鑄造して作ります。中国を中心とする東アジアの貨幣は、あまり使う人が量に厳密でなくても受け取られるようになります。その貨幣の価値を決めているものは、国家の権力というものが関係してきます。ヨーロッパでは、国がいくつにも分かれて、対立をする時代が多いため、国を超えて貨幣が流通することは、そのもの自体に価値があるような貴金属で作られる必要がありました。しかし東の方の世界では、銅の価値が低いということで、鑄造した貨幣が流通してくる。その貨幣の価値は国家が決め、強制することになります。これは、中国の世界では、一つの王朝が非常に広い地域を統治することが一般的だったためです。

東洋と西洋の基本的な貨幣の違いがここに 있습니다。西洋の貨幣は金銀で作り、これに刻印を押すことで貨幣のかたちになります。これに対して東洋の貨幣は銅を鑄造して、その価値は国家の権力が介在をしてきます。

西洋の貨幣がどのように広がっていくのか。そのもの自体に価値がある貨幣は、進出力が強い。中国のように国家権力が貨幣の価値を決めている場合は国家権力の範囲を超えて貨幣が広がるということはなかなか起こり得ないわけです。西洋型の貨幣というものが旧大陸の広い範囲に広がってくるようになります。それにとどまらずに新大陸が発見されると、新大陸にもヨーロッパ型の貨幣がスペインによって持ち込まれます。

15世紀に、コロンブスによって新大陸が発見されます。そもそも新大陸発見に至る動機は、ヨーロッパのならず者たちが一攫千金を目指して、マルコポーロによって伝わっていたジパングへ行こうと考えたことに始まるのです。しかし、東の方へ行くのは難しい。「どうやら最近、地球は丸いと言われているようだ。逆方向の西へ進めば、アジアに到達できるのではないか」と考え、ヨーロッパのならず者たちが、西へと航海をして、アメリカ大陸を発見することになります。

最初はアジアだと思っていた場所は、アジアとヨーロッパの間の別の未知の大陸だと、認識が新たになるわけです。そこにはすでにかなり高度な文明があり、その国の権力者が様々な財宝を蓄えていました。コロンブスが新大陸を発見して30年がたった頃、1521年、スペインのコルテスがアステカという国を見つけます。アステカを滅ぼして、そこに蓄えられていた財宝を略奪します。それから10年後の1533年、スペインのピサロが南アメリカのインカ帝国を滅ぼします。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

この後講演では、西洋型貨幣の地域拡大や世界統一までの過程や、西洋型金銀貨幣が終わりを迎えるまでについての解説。また、東洋型貨幣の地域拡大と紙幣の誕生についての説明。また、日本貨幣の西洋的な性格と東洋的な性格の複合性を持つ特質について、時代を順に追いながら興味深い解説をしていただきました。

(文責I-OWA)



I-OWA マンスリー・セミナー座談会より 和同開珎をめぐって

岡本 | 一般的には和同開珎(わどうかいちん)といいますが、今村さんは「わどうかいほう」と呼んでいるその理由を教えてください。

今村 | 708年、関東の和銅で、和銅という銅が見つかり、おめでたいことなので、世の中に知らしめる為に年号を変えることにしました。そして、慶雲から和銅に年号が変わりました。同じく発行された貨幣は和銅開寶(わどうかいほう)でなくてはいけなかったはずですが。ところが、銅という字と寶と言う字が込みいった字のため、これを銀で鑄造するのは非常に難しい。そこで単純な字にするために「銅」が「同」に「寶」がウ冠と貝の間をとって珎になりました。この和銅開寶を発行したのは、それまで使われていた銀銭である無文銀銭を銅銭に変えることを目的としていました。

無文銀銭を和銅銀銭と交換しやすくするために、まず、和銅銀銭を発行し、その後、寸法も自体も同じ見かけの和銅銅銭に交換させるという計略でした。まず、銀銭を発行する必要があったけれど、銀銭では難しい字は作れなかった。実際に和銅銀銭はあちこちの博物館に残っていますが、非常に字が汚いです。やっと和銅開寶と読める程度で、きれいに鑄造できている銀銭はほとんどありません。



当然ながら省略した文字が鑄造されたため、和同開珎の字体になってしまった。珍の意味を持つ珎と呼ぶのは間違っていないですが、本来は寶という字を省略したため「ほう」と呼ぶべきです。

和同開珎のあと、萬年通寶というお金が発行されますが、そのあと、神功開寶というお金が発行されます。その経過をみていくと、これは寶という字が相当するのだということがわ



長期投資仲間通信「インベストライフ」

かります。萬年通寶は4～5年発行されますが、割と短期間でおわり、神功開寶というお金にかわります。

和同開珎は708年～760年まで発行された長続きしたお金です。760年に萬年通寶に変えられ、和同開珎の10倍の価値だと命令されました。萬年通寶は長続きしません。765年には代わりに神功開寶が発行され、30年位続きます。和同開珎から萬年通寶に変わった理由は、お金の価値を10倍にする目的もありますが、当時の女帝孝謙天皇が藤原仲麻呂によろめいたからと言われます。孝謙天皇は彼を取り立てました。彼に貨幣の発行権を与えます。貨幣の発行権をもらった藤原仲麻呂は、新しく発行する萬年通寶に和同開珎10倍の価値をつけそれを使わせることにしました。

それから4～5年後、孝謙天皇は今度は弓削道鏡というお坊さんに再びよろめきます。弓削道鏡のことを何でも聞いて、藤原仲麻呂を疎んじることになります。藤原仲麻呂は権力を取り戻そうとクーデターを起こしますが、失敗し殺されます。

孝謙天皇は恩を仇で返したと大変怒り、藤原仲麻呂の時代にやってきたことを、全部否定します。法律も撤廃し、彼が作った萬年通寶もきられ、代わりに神功開寶が発行されます。アジアには文字を刻んだお金が何百種類とありますが、開寶と名前のついたお金は和銅開寶と神功開寶の2種類しかありません。萬年通寶が否定をされた代わりに作られたのが神功開寶なので、神功開寶の開寶は和銅開寶の開寶と見るのが妥当だと思います。神功開寶の神功は神功天皇からきています。神功天皇は女帝です。孝謙天皇になぞらえて神功開寶が作られたと考えられます。

寶という時をなぞらえて作られたわけですから私の考えは和同開珎(わどうかいほう)と呼ぶべきだと思っています。学校の教科書では和同開珎(わどうかいちん)とわざわざルビをふってありますが、これはおかしい。

参加者 | 和銅は、秩父で銅山がとれたわけですね。でも、秩父はそんなに大きな銅山ではないですね。

今村 | あれは作り話だからです。

参加者 | どうして秩父で銅が出たという作り話になるのですか。

今村 | 銅の和同開珎を作りたい。そのために、その価値をできるだけ高めたいという計画がありました。まず銀で作り、その後、銅で和同開珎を作ります。この銅は、特別な銅で、そんじょそらの銅とは違うということを示したいがために秩父で銅が見つかったということにした。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

それが非常にめでたいことだから年号を変えた。年号を変えるほどの出来事かといいたいわけですね。

参加者 | だからフェイクニュースなのですね。

今村 | そういうやり方で銅銭の価値を高めようとした。この頃の政治は、人々のイメージを変えることで価値を高めようとしていたのですね。

岡本 | 今でもありそうですね(笑)。

今村 | 蓄銭叙位令が、和同開珎の少しあとにでます。「民衆は愚かであり、お金の意味を理解しないのでお金を使おうとしない。しかし、お金を使うことは大変偉いことであり、お金を使う民には位を授ける」ということをします。当時、位をもらえることは他に手段がない。お金を貯めれば位が授けられると、皆お金を集めるようになります。

自然に和同開珎の銅銭の価値は上がっていきます。価値を上げるためにそういうことをして人々を導く。「位を授けるからお金を集めなさい」と言っていますが、蓄銭叙位令の最後にちらっと「集めたお金は役所に差し出さなさい」と出てきます。なんのことはない、お金で位を売ってやるということです。

それを長々と「お金を貯めることは偉いことであるから、位を授ける」というような話を作り、最後に集めたお金は提出しなさいということになっています。それはけっこう成功して、皆が銅銭を集めました。和同開珎の値うちは、当時、中国で流通していた開元通宝の大体 20 倍ぐらいになり、高い価値で流通します。ただし、これはいつまでも続きません。徐々に銅銭の価値は下がってきます。どうしようもないほど価値が下がると別の貨幣である萬年通寶を発行することになります。

萬年通寶は和同開珎の 10 倍の価値があると、ただ命令するだけで 10 倍の価値があったのか。東洋の貨幣は価値がかかれていません。一つは 1 文と数で数えるわけで、単位はかかれていません。その為、勝手に価値が上がったり下がったりするわけです。初めは高く設定するけれど、時間が経つとだんだん価値が下がっていってしまう。

参加者 | モンゴルから明になる時代にかけて、銅銭の時代からだんだん銀に変わって紙幣になったというお話がありました。素朴な疑問で元の時代に、銀の塊のおかげで高度成長マネーがよくまわったと理解しています。銀をどこから持ってきたのか、どの程度、経済にインパクトがあったのか。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

今村 | 中国はある程度、銀を継続的に出していると思いますけれど、豊富に入ってくるのは16世紀、コロンブスが米国を見つけて、ポトシの銀山を見つけてから大量に銀が中国に持ち込まれるようになるわけです。

それまでも銀はありましたが、貨幣の中心になる存在ではなかった。それからおかしなことに中国ではあれだけ銀を使っていながら銀貨というものが19世紀の終わりになるまででてこない。みんな銀の重さを量って取引をする。どうして中国では長い間、銀がお金にならなかったのか。そのへんの問題はこれから課題になると思います。

お金になってしまうと、名目化してきます。つまり実際は銀の量が減っているにも関わらず、価値だけが昔の価値を維持するというのを当時の政権が画策する。これはお金になるとどこでも起ってくることです。実体価値と名目価値が離れていってしまう。

参加者 | 例えば明の時代に銅銭からお札というものが生まれた場合、銅の流通はけっこうありましたか？それともちょうどいいお札というものができて、ジャンプしたと考えるべきか。銀もお札として通貨として流通したと考えるべきなのかどうでしょう。

今村 | 正確なところはわかりませんが、ある時期、紙幣と通貨が両方流通していた時期はあります。それから明の時代になって圧倒的に銀の金属そのものになるわけですが、その銀の代わりになるような紙幣が少しは存在したはずですが。それから清朝に入っても、銀の金属以外に、銀の代わりの紙幣というのが存在したけれど、ちょっとその辺が複雑で僕も理解していません。単純に紙幣になったというのではなく、引換券みたいに世の中で使われていくというような状況がある時期あったと思います。

岡本 | 話は尽きませんが時間がきてしまいました。今村さん、みなさん、今日はありがとうございました。

(文責I-OWA)